

銅山至宝の彫母銭は実在した

秋山源

- ⑥銅山至宝 当百 大字 通用銭
- ⑦銅山至宝 当百 大字 母銭
- ⑧銅山至宝 当百 大字 彫母銭
- ⑨銅山至宝 当五十 母銭
- ⑩銅山至宝 当五十 彫母銭

前回まで秋田の銀判を中心に紹介しましたが、鈴木喜右衛門家十三代重興氏（以下、鈴木喜右衛門氏）は、地元である秋田の貨幣は銀判だけ

でなくさまざまな分野のものを精力的に通り蒐集されたそうです。

今回は、そのなかでも銅山至宝について、鈴木喜右衛門家に伝わった新発見の彫母銭を含めて、これまでの研究されたことを佐藤清一郎氏の『秋田貨幣史』を中心に、あらためてご紹介いたします。

銅山至宝は、当百文銭と当五十文銭の二つの額面が存在します。表面には当百文銭は廻読で「銅

山至宝」、当五十文銭には「銅山至宝」とあり、裏面には当百文銭は対読で「當百久二」、当五十文銭には「久二五」とあり、「秋」の陰刻が右上に打たれています。なお「久二」は文久二年（一八六二）のことで、このころ鑄造が開始されたとみられています。佐藤氏によると、材質は銅と鉛の合金で、その比率は8:2と鉛分がほかの貨幣よりも多く、製作も粗雑で、使用中に欠損したものが多くとされています。



【図⑦】⑥ 銅山至宝 当百 大字 通用銭
鈴木喜右衛門氏旧蔵



【図⑩】銅山至宝 当百 小字 通用銭
(CCF オークションカタログより)



【図⑬】銅山至宝 当五十 通用銭
(CCF オークションカタログより)